

文部科学省科学技術人材育成費補助事業
女性研究者研究活動支援事業（拠点型）

研究者リレーコラム & ロールモデル集

★～秋田で活躍する研究者からのメッセージ～★

目次

研究者リレーコラム

01 奥山 順子

□秋田大学
教育文化学部 こども発達・特別支援講座 教授 P02

02 脇野 博

□岩手大学
教育推進機構 教授 P04

03 藤田直子

□秋田県立大学
生物資源科学部・生物生産科学科 准教授(現教授) P05

04 Mark Williams (Former Vice President/ 元国際教養大学副学長)

□Akita International University
Vice President for Academic Affairs P07

05 御子神 隆也

□聖壇女子短期大学
生活文化科 教授・図書館 図書館長 P09

06 蓬沼直子

□秋田大学
医学部総合地域医療推進学講座 准教授 P11

07 大原かおり

□聖園学園短期大学
保育科 講師 P13

08 志賀くに子

□日本赤十字秋田看護大学
看護学部看護学科 准教授 P14

09 野辺理恵

□秋田県産業技術センター
素形材プロセス開発部 研究員 P16

10 小林香代子

□秋田県果樹試験場
品種開発部 主任研究員 P18

11 保坂芽衣

□秋田県水産振興センター
増殖部 研究員(現総務企画室 総務企画班 技師) P19

12 小池晶琴

□秋田県立大学
生物資源科学部・アグリビジネス学科 助教 P20

13 北川悦子

□秋田県農業試験場
原種生産部 部長 P21

14 志邨匠子

□秋田公立美術大学
美術学部 美術教育センター 教授 P22

15 森井真也子

□秋田大学医学部附属病院
小児外科 助教 P23

16 大戸貴代

□秋田大学大学院医学系研究科
医学専攻 生体防御学講座 助教 P25

ロールモデル

01 福山蘭子

□秋田大学
大学院工学資源学研究科 附属理工学研究センター 助教 P28

02 森井真也子

□秋田大学医学部附属病院
小児外科 助教 P29

03 中島佐和子

□秋田大学
ベンチャーインキュベーションセンター 助教
(現大学院工学資源学研究科 情報工学専攻 助教) P30

04 松本奈緒

□秋田大学
教育文化学部 教育実践講座 准教授 ... P32

05 佐藤(永澤)奈美子

□秋田県立大学
生物資源科学部 生物生産科学科 准教授 P34

06 石沢千佳子

□秋田大学
大学院工学資源学研究科 情報工学専攻 講師 P35

07 井上みづき

□秋田県立大学
生物資源科学部 生物環境科学科 助教... P36

08 筒井幸

□秋田大学医学部附属病院
精神科 助教 P37

09 佐藤理恵

□DOWA メタルマイン株式会社
製鍊部 製鍊技術研究所 秋田駐在 主任研究員
(現秋田製鍊株式会社 生産管理部) P38

10 藤田直子

□秋田県立大学
生物資源科学部・生物生産科学科 教授... P39

11 石田頼子

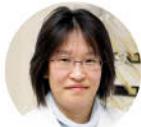
□秋田県農業試験場
企画経営室 主査 P40

12 菅原香織

□秋田公立美術大学
美術学部 景観デザイン専攻 助教 P41

このコラム＆ロールモデル集は女性研究者
支援ネットより記事を転載しています。

<http://www.akita-u.ac.jp/jyoseishien/> 



研究者 リレーコラム



[2014.4]

子どもにとっての親・ 子どもにとっての保育

おくやまじゅんこ
奥山順子

●秋田大学
教育文化学部 こども発達・特別支援講座 教授



Researcher

現在、子どもを育てながら仕事を続けておられる方の多くは、保育所あるいは幼稚園での預かり保育などを利用していることだと思います。最近は、保護者・家庭の多様な実情に対応できるように、病児保育、長時間保育、休日保育など保育の提供の形態も多様になってきました。働く親たちにとっては、子育てと仕事の両立はしやすい状況が整えられつつあるように見えます。そして保育の現場では先生方が様々な工夫や配慮の下に保育を展開し、子どもたちと共に生活する場を豊かなものとなるよう努力しているものと思います。

働きながら子どもを育てる皆さんにとって保育の場が必要であることは言うまでもありませんが、子どもにとっても、保育の場は家族とは異なる人たちと出会い、友達と出会い、家庭では経験することのできない新しい出会いも体験して成長していく大切な場所です。保育所や幼稚園で過ごす間は子どもにとっての先生方は、親のように安心して共に過ごせるよりどころとなっています。

保育の場では、そこが子どもにとっての安心の場となるよう、そして子どもにとっての幸せな生活の場であるようにと、多くの保育者が努力をしています。その一方で、配慮された保育所や幼稚園にも、どうしても実現できないことがあります。それは、集団の場であるということによるものです。その日の気分やその時の状況によって、一人の世界に浸りたくても、計画された生活とは違うことに興味が向かっていても、集団の生活ではそれを実現してもらうことには限りがあります。もちろん、そういうことを通して我慢したり友だちと一緒にしようとしたりすることも子どもの成長には大切な経験です。しかし、ひとは誰でも、自分は自分、他の誰でもない「自分自身」として受け止められ、受け入れられる経験が必要なのです。特に幼児期から小学生くらいまでの子どもの時期にこそ、そうしたことをしっかりと実感できることが生涯にわたる発達の上でとても大切なことです。保育の場でもそういう一人ひとりへの配慮はなされていますが、子どもにとって

ちゃんとそれを実現できるのは、親・家族です。主体として生きることのできる、ひととしての成長のはじまりを支える存在です。

よく、仕事から帰つて家事に取り掛かろうとしても子どもの機嫌が悪くて困る、甘えがひどい、反抗的、などという声が聴かれます。ほんとうに子どもは大人の思惑通りにはいかないものです。何度も言ひ聞かせても繰り返し同じようにして自分をアピールしてきます。仕事に疲れた身としては「泣きたいのはこっち」と言いたくなることもあるかもしれません。しかし、それはお仕事でがんばっている大人と同様に、子どもも保育という社会の中でがんばっている証しだもあるのです。

そんなときには、ひと息ついて、子どもがちゃんと自分を主張して、受け止めてほしいというメッセージを送っていることを、成長の表れとして喜んで受け止めてみるようにしてみましょう（多くの場合は自然にそれができているはずですが…）。疲れていてそんな気分にならない、子育てがうまくいっていないことの表れなのではと不安になる、忙しくてそんな悠長なことはしていられない、先生や他の家族への不満も……、そんなことも時にはあるかもしれません。その気持ちは、とりあえずそのままでもいいのです。でもちょっとだけ後回しにして、まずは、子どもを「たつた一人のあなた」として受け止めてみてください。わがままを許すこととは異なります。まずはそのまま受け止めることです、拒否や否定をせずに…。

その場で問題解決などしなくともいいのです。無理にいい親であろうと振る舞う必要もありません。困ったときには親だって「困った」と言ってもいいのです。幼い子どもでも、そういう大人のほんとうの気持ちは、ちゃんと感じ取ることができるものです。だからこそ、まずは、たつた一人の主体としての自分でいられる家庭では、子どもを受け止めることです。そうすれば、子どもも親を受け止めていくことができる信じて……。

他の誰でもない、たつた一人の子どもと、たつた一人のあなた（親）との関係です。

社会に多様な保育サービスが充実することは、働く者にとっては歓迎したいことです。親も子どももそこで生活で、人とのかかわりを広げていってほしいもの。しかし、先に書いたように、集団保育の場は、どんなに頑張って子どもたちに自由な世界を保障しようとしていたとしても、人間関係も場所も時間も、子どもの意志で自由にはならない部分も必ずあるところだということを大人は理解している必要があります。家族や保育施設、そのほか子どもにかかる人たちが柔軟に協力しあって、子どもの育ちを支えていきたいものです。



[2014.5]

ウーマンリブから 男女共同参画へ

わきのひろし
脇野 博

● 岩手大学
教育推進機構 教授
(元秋田工業高等専門学校 人文科学系 教授)



Researcher

私が通った神奈川県立の高校は、男子と女子の比率が1:3と女子が多く、また1970年代後半に過ごした大学学部時代も歴史学（日本史）を専攻したことから、比較的女子が多かつた。その後の大学院時代も、ゼミや研究会には女子が少なくなく、さらに女子校で非常勤講師をしていたこともあります。私にとって学校に女子生徒・学生が多いことはあたり前のことであった。

しかし、四半世紀前に秋田工業高等専門学校に就職したとき、女子学生が非常に少なく、まさに男子校のようであったので、それは新しい体験であった。当時は、まだウーマンリブの時代であり、私も社会科の授業で積極的に男女平等や女性差別を取り上げた。なお、現在は授業でウーマンリブと言っても、この言葉自体を知らない学生が多く、隔世の感がある。

さて、ウーマンリブから、フェミニズム、ジェンダー、そして男女共同参画と、キーワードは変遷していったが、それとともに私も社会科の授業で男女平等のテーマを特に意識して取り上げることは少なくなつて

いたたのように思う。それは、このテーマを取り上げなくなつたということではなく、意識せず普通のこととして取り上げるようになったということである。そして、この間に秋田高専でも女子学生が段々と増え、いまではクラスの半分近くを女子が占めるクラスもある。また、私が高専に赴任したときは、女子職員は60名ほどのうち3名ほどであったと記憶しているが、現在は約三割を占めている。

このように、昔は女子が少なかつた学校でも女子は増え、女性の社会進出が進むなかで、私の男女平等の授業もさまざまなテーマの中の一つという風になりつつあるのかもしれない。いつか男女共同参画があたり前のことになり、この言葉が自然消滅する日が来ることを期待したい。



[2014.7]

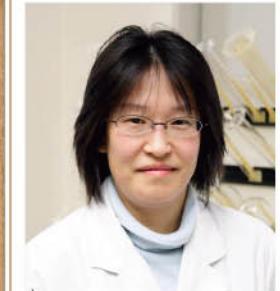
生物系分野における女性研究者の立場から ～がんばれ！女子学生！！～

ふじたなおこ
藤田直子

●秋田県立大学
生物資源科学部・生物生産科学科 准教授（現教授）

女性研究者が男性研究者に比べて少ないことは言うまでもないが、その割合は、分野によってかなり異なる。一般に理系（工学系、農学系、理学系等）は文系、家政系、看護系よりも少ない傾向にあるが、生物系は工学系に比べると圧倒的に多い。これは、おそらくそれぞれの学部の女子学生の割合に由来すると思われる。私が所属する秋田県立大学生物資源科学部は、学年によって異なるが、学生の男女比はほぼ半々であり、中でも私が所属する生物生産科学科は、女子が過半数であることの方が多い。このことを勘案すると、本学部の女性教員の割合、12.6%は、決して多いとは言えない。女性研究者として、多くの男性研究者の中で生きていくには、社会情勢、時代、その人の性格や資質も大きく影響するが、育った環境、即ち、指導教官による教育の影響も大きいと思う。

私の大学院時代の指導教官は、アメリカで学位を取り、アメリカやカナダで長く博士研究員をされた先生だった。これらの国では、日本よりも多くの女性教員がいて、



Researcher



男性と何ら変わることなく研究し、農作業等の力仕事もしていたという。教員から女子学生に対する期待度も男子学生と変わることもなく、その学生の実力、力量で勝負する、いわば、当たり前の状況だったと聞かされた。従つて、私の先生も私が女子だからと言って、特に力仕事を割り引くこともなく（もちろん、女子は筋肉量が男子と比べて少ないため、極度な力仕事は、男子にお願いしていたが）、成果も十分に期待してくれた。

現在も私が学内外で学会活動等をする場合、構成メンバーのほとんどは男性で、会議等の出席者の中で女性は私一人であることも珍しくない。私の指導教官による教育



を始め、これまで恵まれた環境に身を置いていたこともあると思うが、私の場合、女性だからと言って、不愉快な思いをしたことは、これまであまりない。しかし、最近、男女共同参画制度を推進するために、女性が少ない学部で構成される会議等においても必ず女性をメンバーに入れないといけないことから、いろいろな会議等に呼び出されることが多くなってきた。一方で、我々の世代よりも20年上の先輩からは出世や職場待遇など、女子であるばかりに不利であったという話をよく聞いた。現在でも、女性教員の数が極端に少ない学部では、意識が進んでいない、という話も耳にする。従って、多少の会議に引っ張り出されることは幸せと考えなければならないのかもしれない（汗）。

学生を指導する立場になった今、私が男子学生と女子学生を少なくとも性の差で指導方法等を区別することはない。一方で、やはり、女子学生に対しては、企業等の研究者、職業人としてしっかりと生きていくてほしいと強く願っている。我々の学部で

は、ドクターコースに進学する学生が少ないと、大学等での研究者を目指す学生は、男女を問わず、極めて少ない。今後、女性教員を増やすために何をしなければいけないか、と考えた時、我々女性教員が女子学生にとって、女性としてこんな職業に就き、生きていきたい、という、いわば憧れの存在にならなければいけないのかもしれないと思う。少なくとも、学生から見て、楽しそうに仕事をすることは最重要であると考える。また、男性の多い職場であっても気後れすることなく、しっかりと仕事をやつていける基盤を、在学中の女子学生に教育することだろう。

女子学生にとって、将来の結婚や出産は男性以上にいろいろなことを考えなければいけない分岐点になろうかと思うが、既に子供がいながらうまく仕事をこなしている女性を良い見本として、社会で活躍してほしいと思う。もちろん、子育て支援等がこれまで以上に充実したものになっていかねば、先進国の中で職場での女性が占める割合が少ない我が国の発展はないと思う。



[2014.8]

A Woman's Place: Gender Equality in the Japanese workspace

マーク ウィリアムズ

Mark Williams

(Former Vice President/元国際教養大学副学長)

● Vice President for Academic Affairs
Akita International University



Researcher



It was in April 2013 that PM Abe Shinzō offered the concrete detail to support one of the key elements of his economic stimulus package, the so-called 'third arrow' of his 'Abenomics' , when he announced that he was seeking to dramatically increase the number of day care centers in Japan, whilst simultaneously giving both male and female employees access to longer maternity and paternity leave. More specifically, he outlined his determination to accommodate an additional 200,000 children in day care centers by 2015, with this number set to double by 2017 – as well as offering child-care leave to both men and women for the first three years of the child's life. Such developments were widely seen as a core pillar of Abe's commitment to making Japan 'a place where women can shine' , a policy that involved raising the percentage of women corporate managers to 30% by 2020 (announced at Davos in January 2013), and changing the current tax situation which favors 'stay at home mums' .

Abe justified these announcements by

arguing that the appropriate use of female labor 'should be the core of Japan's strategy for economic growth' . As such, taken at face value, one might be forgiven for believing that the future is indeed rosier on the gender front. And yet the cynicism remains. And it is fair to say that there is still some considerable distance to be travelled before a sceptical international public is persuaded that Japan has indeed turned the corner and recognized that its most valuable untapped resource, vital if Japan is to overcome the problems caused by a diminishing overall population and immigration laws that militate against the free flow of much needed labor, is to be found in the misuse and under-use of the 51% female proportion of its population. Actions speak louder than words, as they say – and, until there is clear evidence of progress towards at least some of the Prime Minister's relatively modest targets, the jury will remain out as to the extent to which Abe is genuine in his efforts to secure gender equality.

For many, therefore, Abe's initiatives in

this direction represented little more than a crude attempt to win support, particularly from female voters, ahead of the July 2013 Upper House election. For others, this commitment to gender equality was 'too little, too late' : here, after all, was the man who, in 2005, headed the campaign to squash the 'gender free' movement. And, perhaps most significantly, there were those who questioned what these reforms would do to address the fundamental question of why there were, and still are, so few women in the workplace in the first place. The vital distinction between *sōgōshoku* (elite track jobs) and *ippanshoku* (clerical jobs), thus still remains firmly entrenched in Japan – with only 11.6% of the former positions occupied by women in 2011 and with women earning, on average, some 30% less than their male counterparts. And when it comes to actions designed to facilitate child care arrangements, there are those who argue that, rather than encouraging new parents to leave the workplace for a longer period of time, what the government should really be concentrating on is ensuring that such parents, regardless of gender, are given greater support in ensuring a smoother and more flexible transition back to the world of work.

As an Englishman who has committed the past thirty years to the study of Japan – and having spent the past three years observing these issues in practice at Akita International University, I shall be returning to the UK next month with mixed feelings on these issues. On the one hand, PM

Abe's recent pronouncements represent a welcome glimmer of hope: if these can now be followed up with some practical, concrete measures to ensure that they are not mere 'words' , then the future does indeed appear brighter. And if the apparent shift – to PM Abe viewing this as an economic, as opposed to an ideological, issue – leads to a genuine cultural revolution within 'Japan Inc.' , then this can only be welcomed. At the same time, however, when the news continues to offer up examples of crass male chauvinism – such as the recent heckling of Tokyo City Assembly's ShiomuraAyaka by a male lawmaker, who interrupted her contribution to a debate on family-friendly measures by shouting out, 'Hurry up and get married!' and 'Can't you have children?' – one is left wondering how long it is going to take to eradicate such deep-rooted prejudices. All cultural shifts require time to take root. And there will always be those who use the old 'we have always done things this way' argument – as if, somehow, that provides vindication for entrenched practices that perpetuate an outmoded *status quo*. But all mass movements require leadership and support from the top. If nothing else, therefore, recent pronouncements emerging from the PM's office serve to keep the issue in the public consciousness. It is now up to the often silent majority to ensure that Japan does indeed adhere to the essence of these recent pronouncements – to ensure a smooth and rapid transition to the spirit of the 21st century.

[2014.9]

仕事と家庭の両立のために

み こ がみ りゅう や
御子神 隆也

●聖霊女子短期大学
生活文化科 教授・図書館 図書館長



Researcher

女子教育に携わる者として「良妻賢母」という言葉について考えたいと思います。この言葉には、差別的ニュアンスを感じられ問題視する向きがあるかもしれません。女性に「良妻賢母」があるのに、男性には「良夫賢父」という言葉がない。「良妻賢母」には、女性を家庭に縛りつけ、社会進出を阻もうとする意図が含まれているのではないか、というわけです。女性が「良妻賢母」であることは、家庭にとっても、さらに社会にとっても喜ばしいことであるはずで、それは「良夫賢父」も同じ。その言葉が現代にいたって疑問視されるのは、家庭が社会活動の足を引っ張るものであるかのように、家庭と社会が二項対立の図式で捉えられ、両者の間に軋轢が生じているからでしょう。

家庭と社会の二つについて、女性が家庭向き、男性が社会向きと考えるのは明らかに性差別で、男女平等・共同参画を阻害する誤りです。現代にいたるまで女性の適性は家庭にあると誤解されてきた原因は、女性が出産する性だからでしょうか。出産だ



けは、男性が決して肩代わりできませんから。その出産に育児が結びつけられ、女性は育児も、すると家庭にいるのだから(ついでに?)家事も、とつながって、男女の「役割分担」がそれぞれ社会、家庭という二分法が通例になって行ったのでしょう。この分担制は、単に生存ないし種の存続のためには有利だった、という生物学的な理由があるかもしれません。しかし、他の動物はどうあれ人間は人間、性差で生活上の役割を固定するという時代錯誤を乗り越えなければなりません。これを歴史的に見ると、長い時代、多くの国々で家父長制度が採られてきたことの名残、というより残滓とい

う見方もできるでしょう。聖書やコーランに基づく宗教思想ないし特殊な男女観が悪影響を与えたのではないか、と考える人がいそうですが、「そうではない」とキリスト教思想の研究者として私は否定したいと思います。男女は対等だがそれぞれ固有の特質がある、という記述を、聖典の解釈者（ほとんど男性）が自分に都合よく曲解し、女性差別を助長した、ということはあつたのでしょうか。

この誤りを打破するために、育児・家事という家庭の仕事と、能力の発揮や収入のための社会での仕事、それら二つとも男女両性にとって重要であり、責任の大きさにおいて性差はないという理解を、教育や啓発をとおして広める必要があるのは確かです。そのためには、むしろ家庭の大切さ、人生と社会にとっての出産・育児・家事の重要性を強調し、男女ともに、特に男性に望ましい家庭生活が保証されるような社会制度、労働環境の実現を目指したいと思います。女性の社会進出を言うなら、男性の家庭進出をも言うべきでしょう。

家庭と仕事の一方が他方の邪魔になる、足を引っ張るという構図は、必然ではありません。男性に育児休業、まして主夫業を認めるなんて理想論だ、家庭を犠牲にして仕事しないと経済競争に勝てない、出産し育児する女性を雇ったり役職につけたりするのは経営上のリスクだ、という「現実的な」反論がありそうです。しかし実は、そのことは出産以外に男女の差はありません。これは、究極的に価値観、個人の選択の問題でしょう。私は「主婦」または「主

夫」の社会的評価がもっと高まり（「イクメン」称賛ぐらいでは、まだまだ）、またそれを選ぶ自由が広がってほしい、と考えています。経済活性化のための「女性の社会進出」を政策に掲げる政治家にはにらまれそうですが…。ライフ・ワークバランスをどうするかは、本来個人の自由な選択によるべきですが、実のところ仕事を優先し、家庭、育児・家事を後回しにするという価値観、すなわち経済活動を最優先する不当なバイアスが、日本の社会やその仕組み、特に男性の世界に作用しているのではないかと思います。

キャリアデザインという言葉の「キャリア」には、夫または妻、父または母として生きることが含まれるはずです。そうした「家庭人」（これは企業人の反対語）であることは個人のアイデンティティーの一部であり、その価値を再認識しそれを選択の自由、それを保証する職場環境、社会制度が、特に男性に強く求められています。女性研究者の置かれた環境が男性よりも厳しいとすれば、採用や人事が性別ではなく能力と成果だけで決まるという公平性の実現はもちろん、その夫である男性が「家庭進出」しやすい労働制度が求められます。



[2014.10]

自分自身の人生を デザインしよう！

はす ぬま なお こ
蓮 沼 直 子

● 秋田大学
医学部総合地域医療推進学講座 准教授



Researcher

近年、医学部でもキャリア教育の必要性が認識され、秋田大学では必修カリキュラムとして始まっています。医学部で遅れていた理由は、医学部進学がすでに職業の選択となっているからだと思います。多くの医学生が臨床医を目指し、全員が医師国家試験を受験しますから。そのような理由で、今までではキャリア教育や就職指導が不十分だったかもしれません。

私自身も卒業直後はあまり自分自身のキャリアや将来のビジョンなど深くは考えていませんでした。また医師免許は国家資格なため、何かキャリアに問題が起きるなどとは全く考えてもみませんでした。

秋田大学医学部卒業後、皮膚科医として3年間働いたのち、アメリカの National Institutes of Health に研究留学する機会を得ました。日本ではまだ研究を始めておらず、何もわからないまま留学したので、ラボでは一から丁寧に教えていただきました。現地で長男を授かり、陣痛が始まるまで実験をして産後2ヶ月の産休を経て、ラボにもどりました。周りのアメリカ人女性研究者にも妊婦さんや子育て中の方も多くいて、いろいろ教えてもらいました。私が働いていたのはメラノサイトの生化学的解

析をするラボで、様々な技術を教えていただき、実際に自分のプロジェクトや共同研究を行いました。ボスがとてもほめ上手で「初めてとは思えない、美しいデータだよ！」と言い続けてくれたので、自分は実験が得意なのかも？と勘違いして楽しく実験していました。留学では生活を一からスタートさせるので旅行とは全く違います。電話を引くのにも一苦労で、申し込みの電話をしたところ電話会社の様々な部署をたらいまわしされたあげくに切られてしまったことなど、たくさんのトラブルがありました。子供の病気や保育園選びなども言葉の壁を乗り越え、自分の納得のいく保育環境を整えて、仕事をした経験はとても得難いものです。帰国後友人には押しが強くなつたなどとからかわれましたが、精神的にタフになって帰ってきたことは間違いないく、自分自身が仕事をしていく上で大きな武器であり財産です。

さて、ここまででは良かったのですが、2年9ヶ月の研究生生活を終えて帰国した際、様々な状況が重なり、いわゆる専業主婦をしていました。数年間の離職を経て、県外で大学院研究生という立場で復職したのですが、その時に初めて何も考えずに離職す

ると後でどんなことが起きるのか知ったというわけです。私が留学して基礎研究をしたり、子育てをしている間に医学（皮膚科学）はものすごいスピードで進んでいました。初めて聞く新しい治療薬や治療法、疾患概念まで変わっているものもありました。さらに、社会人として復帰し、その上で患者さんの命を預かる医師としての復職が必要で二重の壁があることにも気付きました。その後秋田に帰り、フルタイムの医師としての仕事に戻ったわけですが、ブランクにより経験が少ないことはいまだにコンプレックスになっています。ただし、そのことが一生懸命皮膚科を勉強しようというモチベーションにもなっています。

自分自身が指導医になり、一度離職して復職した際に、想定外の状況を経験した立場からは、なるべく仕事を辞めずに続けてほしいということを学生や若手医師に話しています。「細くなった糸は容易に太くできるけれど、切れてしまった糸を紡ぎ直すことは難しい」どなたの言葉かわかりませんが、これは事実だと思います。ペースダウンしたとしても、臨床に触れていれば、容易に新しいことをキャッチアップできるのではないかと思います。

また、将来起こりうる様々なことを学生のうちから知っておくことが、キャリアを積む上で重要だと考え、現在医学部で行っているキャリアや男女共同参画の参加型必修講義を含む様々なイベントにつながっています。

現在キャリアの考え方は山登りキャリアと波乗りキャリアというのがあるそうです。山登りキャリアは登山道を一步一步登っていくもので、ゴールも道のりもクリアです。一方波乗りキャリアは海に出てみないとどんな波かわかりません。しけて荒れているときもあれば、波がなく自分で漕

がないといけない時もあるでしょう。昔は一本道の山登りキャリアで先輩の後ろをついていけば間違いない！と思われていたのでしょうが、現在は女性も増えキャリアパスも多様化しています。おそらく女性は周りの状況やライフイベントに左右されることから、波乗りキャリアで行くことが多いと思います。でもキャリアを積んでいくと、ある地点から山登りキャリアにかわるかもしれません。男性も山登りキャリアと安心していなければいけません。現代は兄弟も少なく、両親の介護が男性にも容赦なく降りかかるてくるからです。遠距離介護が必要なケースもあるでしょう。そうなると山登りキャリアから波乗りキャリアへ変更が必要です。いずれにしても柔軟に対応していくといけないといけないでしょう。

キャリアを考える際には、自分がどんなことがしたいのか、何が得意で何ができるのか、何に価値を置いているのかといった内的キャリアを考えながら進んで行く必要があります。経験により変わることも多いので、折に触れてみてください。そして現在だけでなく未来をみて、3年後や5年後、あるいは10年後にどんな自分でいたいか、何ができるようになっていたいかなども考えて、できれば言語化しておきましょう。手帳などに書いておくとよいかもしれません。自分の将来のビジョンや医師（または自分の職業）としてのミッションを明確にしておくことで、もし波乗りキャリアの途中で海が荒れてどこに辿りつくのかわからなくて不安でも、山登りキャリアを進んでいてわき道にそれてしまつたことに気づいても、しっかりと自分のキャリアを考え歩んでいけるのではないかと思います。

皆さん、人生を振り返ってよい人生、よいキャリアだったと思えるように、これからもサポートできればと思っています。

[2014.11]

急け者の靴屋でも……

おおはら
大原かおり

●聖園学園短期大学
保育科 講師



Researcher

「どこかにこびとさん、いないかなあ……」
かつての職場で、誰ともなくよく交わした会話である。

グリム童話の「こびとのくつや」は、働き者だが貧しさのため、靴一足分の材料しかなくなってしまった靴屋が主人公である。その靴屋が眠っている間、小人が立派な靴を作ってくれたことがきっかけで生活が豊かになったというお話である。

実際に小人が勝手に仕事を片付けてくれては大変だが、そのときは溜まった仕事が片付いた爽快な気分を、妄想ながらも味わいたい気分だったろう。

仕事に関して「こびとさん」は望めなくとも、我が家には大人の「こびとさん」一人と子どもの「こびとさん」が二人いる。さて、彼らに何をしてもらおうかと、急け者の靴屋は企むのであるが、材料を用意してもなかなか思い通りに靴は仕上がらない。大人の方は世に言うイクメンぱりに動こうとしてはくれているが、出張や残業が多いし、やることがどこか抜けている。小学生と幼稚園児の方は「妖怪」に夢中。朝起きたらご飯が用意してありました。とか、仕事を終えて家に帰ると洗濯物がたたんでありました。などということはまずない。仕方なく靴屋は重い腰を上げるのだった……。

家事と仕事の両立についての励ましは、既婚女性につきもののようにいわれるが、気遣う言葉をありがたく思いつつも、共働きであ

る以上、女性ばかりではなく家族それぞれができることもできないことも協力し合うのが当然としてきた。お陰で「鬼嫁」と陰口をたたかれてはいるが、仕事と家庭の板挟みになつて独り思い悩むよりは「鬼」になった方が心と身体の健康が保てると思うようになったからである。パートナーとはそれぞれの持っている性格、仕事の特性、立場と違いがあるため、決して同じ割合で家事を分担できるものではないが、できないと決めつけずにお互いに確認しながら家事をして欲しい。そこは繰り返してきたつもりである。

また、自分も完璧に家事をこなそうという強迫観念を持たなくなった。傍から見たらだらしがないと思われるかもしれないが、家の中のことで目くじら立てることも少なくなり、だいぶ気持ちが楽になった。

理想的なあり方ではないが、多少目をつぶりながら生活をしている現状に満足している。家事も仕事も取りこぼしなくやろうと力が入っていた頃よりは心穏やかに過ごせているのだ。

結婚して十余年、いろいろあったが、少しずつではあるがパートナーも家事をしてくれるようになり、息子たちも手伝ってくれるようになった。息子たちには、家事はやって当たり前という人に育ってほしいと願っている。そして、いつか家に帰ると温かい晩ごはんが用意してありました。という生活ができるこどを、やっぱり急け者の靴屋は想うのである。

[2014.12]

大切な思春期ー 「性教育講座」を担当して

し　　が　　くに子

●日本赤十字秋田看護大学
看護学部看護学科 准教授



1996年全国7.0、秋田県9.9、1998年全国9.1、秋田県12.2、2000年全国12.1、秋田県17.7。これは10代の人工妊娠中絶率（15-19歳の女性人口1,000対）を示す数字で、秋田県では全国平均より高い数値でした。この状況から秋田県教育庁・秋田県教育委員会では、秋田県内の全高等学校へ、性教育講座講師派遣事業を開始しました。また秋田県医師会でも、秋田県の若年出産・中絶数の多さや日本におけるHIV/AIDS増加の現状をふまえ、2003年、性教育プロジェクト委員会を立ち上げ性教育派遣講座への医師派遣の窓口になりました。

そして同時期、日本産婦人科学会秋田地方会と日本産婦人科医会秋田支部による、性教育指導マニュアル「すこやかな心と体の性の成長をめざして」（田中俊誠、村田純治監修、2004年）が発行されました。このマニュアルは、「月経と第二次性徴」、「妊娠と避妊」、「性感染症」、「セクシュアリティ」、「参考資料」の5章、いずれも基礎編、応用編と構成されていて、CD化

したスライド集が付属されています。

また2002年には、「あきた健やか親子21」として県内10中学校で、2003年には中学校5校と小学校4校で性教育派遣講座が試験的に行われ、2004年から原則中学3年生を対象とする、中学校性教育派遣講座が開始されました。中学校・高校での性教育講座では、生命の大切さ、性感染症、男女交際、妊娠・出産・避妊、妊娠中絶などについて、学校ごとの実態に即した講演が行われています。これらの取り組みにより、秋田県における10代の人工妊娠中絶率は減少してきました（図参照）。

秋田県では、県事業として性教育講座を開催しています。私も秋田県性教育研究会会員として、そのような状況のなか、2003年（平成15年）から「性教育講座」を担当しています。秋田県性教育研究会は、1973年（昭和48年）に設立され、研究会活動の一つとして「性教育講座」を依頼され実施しています。

「性教育講座」の目的は、様々な性情報が氾濫するなかで性感染症や性に関する正



しい知識を身に付け、社会的な風潮に流されることなく、正しい行動を選択できることとされています。生命の大切さ、生命を育む女性の心と身体の大切さ、自分を大切にし、他人にも思いやりをもつことを学習する、性の健康教育はきわめて大切だと考えます。思春期の健康は、生涯の健康、次世代の健康につながるものだからです。

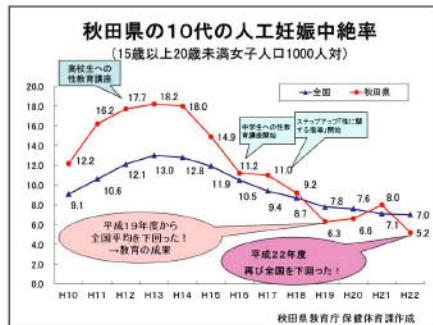
中学校を対象とする性教育講座は年間數十校ありますが、私はそのうち秋田県性教育研究会会員として3~4校の中学生を対象に講座を担当しています。「思春期」「性」「性感染症」「男女交際」「妊娠」「人工妊娠中絶」「性被害」「生命」などをキーワードにして、おおよそ対象校の求める内容を準備します。

「性」は特別なものでもなく、常に身近にあるものであると説明しています。自分の心や身体を大切にすること、すなわち食事を摂る、質のよい睡眠をする、適度に運動をすることなどが「生きる」ことであり、「性」だと考えます。大切な思春期、多くのことを学校における学習、友人との関係を通じて学んで欲しいと願っています。一

度の講座で生徒らが正しい知識を得たか否かの評価は困難ですが、正しい知識を得る大切さに気づくことができると思われます。

秋田県のように専門家と学校が連携することで、性教育はより充実するものと思われます。また医学的な知識だけではなく、現場の教師も自分や相手を尊重することや、自分の行動に責任をもつことなどを教えていくことが大切になると考えます。

今後も思春期の心とからだの発達を中心に説明しながら、自らの性に向かう機会となるように心がけていきたいと思います。



秋田県教育庁 保健体育課作成
あきた子育て情報いっしょにねつ。

◎ホームページ
平成24年2月24日第5回
思春期における性と生
～秋田県と県医師会の性教育連携の成果～

[2015.2]

いつやるの!? 今でしょ!!

—外国人に学ぶキャリア形成—

の野辺理恵

●秋田県産業技術センター
素形材プロセス開発部 研究員

2009年1月、2年ぶりに日本の地に足を付けた私は、いきなり現実を突き付けられた。それは税関に提出する申告書の職業欄に「無職」と書かなければならなかつたからである。2007年1月からの2年間、私は青年海外協力隊（以下、JOCV）に参加し、モザンビーク共和国で物理教師として勤務していた。JOCVに参加する前は、秋田県内の企業で工作機械の設計・開発の仕事に就いていた。正社員であつたし、仕事内容に特に不満はなかつた。しかし、海外で自分の可能性に挑戦したいと思い立ち、会社を辞めてJOCVに参加した。その後、2013年4月に現在の職に就くまで、

私のキャリアはまさに「いつやるの!? 今でしょ!!」で形成されていった。それには、日本を出たことで変わった価値観が影響していたと思う。

日本に帰国する数カ月前から、「研究職に就く」と心に決めていた。だが、2年1カ月で仕事を辞め、モザンビークなんて誰も知らないような国で、教員免許もないのに教師をしていたなんという私が研究職に就ける可能性は限りなくゼロだった。生きていくためには仕事はしなければならない、大学の嘱託職員になり、事務仕事をした。毎日、どうやってこの状況を脱出しようか考えていた。そしてふと気付いた、「大学院で勉強し直せば、研究職に就ける可能



性は、少し広がるかもしれない。いつやるの!? 今でしょ!!」と。大学時代の先生にすぐ連絡し、大学院受験の準備をし、社会人入試で合格した。当時 29 歳、新たな挑戦に迷いは全くなかった。

モザンビークでは学校に通うことができない子供たちが多くいる。その反面、大人になり、仕事をしながら夜間学校へ通う人々も多い。同僚の教師達も仕事をしながら大学へ通っていた。勉強を始めるのに遅いなんていうことはないとモザンビーク人が教えてくれた。帰国後、日本へ来ている留学生をみてみると、年齢は様々、結婚し、子供がいる留学生も少なくない。キャリア形成の過程は様々である。一方、日本では義務教育を受けていない子供はほとんどおらず、高校を卒業する人の 50% が大学へ進学する。そして大学卒業後には大学院進学または社会人へと進み、定年まで仕事をする。多くの人にとっては問題ないのだが、私のように寄り道・回り道をした人にはキャリア形成しにくい世の中である。それでも私は「今でしょ!!」の精神で大学院の修士課程を修了し、研究職に就く道を探していた。修了後の 1 年は大学の嘱託職員として実験補助の仕事をした。そして秋田県産業技術センターの研究員へ応募し、2013 年 4 月に採用された。限りなくゼロに近かつた研究職への道だったが、やりたいと思ったことを貫き「いつやるの!? 今でしょ!!」でやっと研究者のスタートラインに立てたのである。

学生の頃から明確なキャリアプランを持ち、その目標に向かって進むことが最も重



要だと思う。特に、男女を問わず、結婚、出産・子育てをしながら研究をしたいと考えている人は真剣に考える必要がある。多くの学生・大学院生にとって、私のキャリア形成は全く役に立たないだろう。でも、私の経験からいえることは、どこかで寄り道や回り道をしても、自分が諦めなければ研究者になる可能性はゼロではないということである。研究者のスタートラインに立った私には、研究者としてやりたいことがたくさんある。何かを始めることに遅いなんてことはない。「いつやるの!? 今でしょ!!」の大切さはモザンビーク人を始めとする、多国籍な友人たちが教えてくれた。私の挑戦は、まだまだ続く…。



[2015.2]

この世で一番怖いもの

こ ばやし か よ こ
小 林 香代子

●秋田県果樹試験場
品種開発部 主任研究員



Researcher

「この世で一番怖いもの、なあに？」答えは「お化け」、「妖怪」、「原稿締め切り」etc、人それぞれでしょう。ちなみに私は「保育園からの呼び出し電話」が一番恐ろしいと思っていました。

朝、時間と戦いながら家事をこなし、子供を保育園に預け、ようやく出勤。ところが仕事中、保育園からの「〇〇ちゃん、お熱があります。」という電話。

その瞬間、仕事をどうしようという「困惑」、また職場に迷惑をかけてしまうという「心苦しさ」、子供は大丈夫かしらという「不安」、登園前に子供の体調不良に気づいてあげられなかつたという「罪悪感」、さまざまな感情が一気に押し寄せます。とるものもとりあえず、保育園へ駆けつける…。働くお母さんなら一度は経験したことのある「恐怖体験」だと思います。

いろいろな職業がありますが、自分で時間をコントロールできる研究職は、子供を持つ人にはいい職種だなあと感じます。自由度が高く、急な休みを取得してもある程度は自分の裁量の中でリカバリーが可能です。それでもやはり組織で働く以上、急な休みは歓迎されず、仕事に大穴をあける危険性があります。また、研究対象が生き物である場合は、絶対に休めない日も確実に存在します。そのため、スケジュール管理をきちんと行うこと、限られた時間内で効率的に仕事を進めることが重

要だと痛感しています。

ただ、最も大切なものの、それは「健康」です。女性が家庭内で担う役割は、男性に比べまだまだ多く、仕事と家庭の完璧な両立を目指すと体がいくつあっても足りません。追い詰められると、心のバランスも崩してしまいそうです。

主人が単身赴任で、平日シングルマザーの私は、「完璧」をあきらめることにしました。家庭内の物事を「やらなくてはいけないこと」、「やった方がいいこと」、「やらなくてもいいこと」に振り分け、「やらなくてもいいこと」ができなくても気にしません。食洗機や掃除ロボットをフル活用し、食事も多忙時は外食産業を利用します。栄養バランスからみるとバツなのでしょうが、月に数回なら問題ないと思うようにしました。周囲には「時間をお金で買った」とうそぶいていますが、肉体的にも精神的にも余裕が生まれます。仕事にもプラスに働き、人に優しくなる気がします。

保育園時代、よく発熱していた子供たちも、小学生となった今は、ほとんど休みまず登校するようになりました。怖かった「呼び出し電話」はなくなり、代わりに「学校内での集団感染（インフルエンザ、ノロウイルスなど）」が恐ろしい今日この頃です。迷惑をかけても、理解しフォローしてくれる職場の上司、同僚に感謝しつつ、この「恐怖」を乗り越えていきたいなあと思っています。

[2015.4]

荒波にも負けずに

ほ
保 坂 芽 衣

●秋田県水産振興センター
増殖部 研究員
(現総務企画室 総務企画班 技師)



Researcher

私が勤務する水産振興センターでは、秋田県の水産業を元気にするために、水産資源をまもり、増やす研究や調査を行っています。

海川湖のあちこちを行ったり来たり、船に乗って沖に行ったり、自ら海に潜って魚介類や時には漁師さんをもつかまえたりしながら、現状の把握に努めています。

現在、私は研究職に就いていますが、秋田県の水産職員として採用されてから4年間は、県庁で水産行政に携わっていました。

逼迫する県財政の中で、事業や研究を行う予算を確保するために上司や先輩が奮闘する姿を見ながら、県の水産振興は誰のために、何のため行うのかということを、考えさせられてきた気がします。

私たちの職種は人事異動があるため、現在、研究に一生懸命取り組んでいたとしても、この先、性別に関わらず、途中で研究業務を離れなければならないこともあります。

けれども、現在の仕事の良さは、研究に固着せず、業務で得た経験をそれ以外にも

活かし、またその逆も出来ることだと思います。

行政と研究の業務を行つたり来たりするどっちつかずの研究員かもしれません、このような働き方が出来ることは、年齢を重ね、生活環境が変わっていく中でも、その時々の仕事に楽しみや、やりがいを見いだせるのではないかと期待しています。

私はまだ、仕事の上の性別の差はほとんど感じることなく、漁師の荒波にもまれながらも、これまでたくましく育てていただきました。

経験も能力も未熟な私に、上司や同僚が女性だからと特別扱いせずに一人の職員として接してくださったからこそと感謝しています。

今後出会うかもしれない大時化にも負けずに立ち向かい、不器用でも、少しづつでも努力し、秋田の美味しい魚介類をいつまでも、多くの人に届けられるようにしたいと思います。

[2015.6]

農業におけるウーマンパワー

～農業を支える女性研究者として～

こ いけ あき こ
小 池 留 琴●秋田県立大学
生物資源科学部・アグリビジネス学科 助教

Researcher

平成 25 年における全国の基幹的農業従事者は 174 万人程度おり、女性は約 40% を占め、すでに「女性の力」は農業や地域活動の担い手として重要な役割を果たしていると言えます。この比率は平成 9 年のそれよりも、約 2 倍に増加しています。増加の背景として、農産漁村で活躍したいという女性に対する支援団体のバックアップや、農林水産省の補助事業として女性優先枠を設けるなど、農村女性の起業を後押しする動きが追い風となっていること等があげられます。農業においても、徐々に女性の活躍や声が受け入れられてきているのです。

また近年、農業を学ぼうとする女子学生も増えてきています。私の所属する秋田県立大学生物資源科学部のアグリビジネス学科でも女子学生の比率は 40% に及んでおり、男女問わず日本の農業について興味関心を持った学生が多数集まり、大潟村にある日本一を誇る広大な附属農場では、女子学生も積極的に活躍しています。しかし、学科に所属する女性教員は私を含めて 3 人と少なく、やはりまだ農学に関する研究分野も男性社会であると痛感しています。

私の研究分野である畜産においても、女性研究者はまだ少ないのが現状です。そもそも、生き物を飼育し生産物を得る畜産業は、力仕事も多く、どうしても女性だけでは営めず男性の力ありきの産業であるのは間違いないかもしれません。その中で女性にできることが何かを考えることで、将来、就農する若者、特に女性たちの活躍の場を広げられると思います。畜産では、和牛の繁殖や酪農ではメス牛相手の世界であり、産まれる子牛もたくさんおり、それらに対しきめ細やかに愛情を持って接する必要があります。女性は男性と比べると体力や腕力はかないませんが、柔軟性やコミュニケーション力には長けている人も多く、そうした女性の特徴を生かすことこそがこれから畜産経営のカギになると思います。女性が元気な地域は、活性化されて元気になるとも言われていますが、これからの農業についても同じです。日本の農業におけるウーマンパワーは、農業を活性化し元気にできると信じて、今日も私は、より良い牛のエサを開発するために、牛と向き合い研究に励んでいます。

[2015.7]

試行錯誤の ワーク・ライフ・バランス

きた がわ えつ こ
北川 悅子

●秋田県農業試験場
原種生産部 部長



Researcher

結婚を契機に他県の公務員を退職し、秋田に戻ってきて専業主婦となった。育児をしながらでもまだ余力があると思い、一念発起して再就職にチャレンジし、34歳のとき秋田県職員になった。以来20年以上、公設試験研究機関の研究員として勤務している。

農業試験場原種生産部には平成17年に配属され、今年で11年目になる。原種生産部は、稻、麦、大豆の原原種・原種（農家の方が使う種子の元種子）生産を担当する部署であるが、種子生産に特化した部を設置している農業試験場は全国的に珍しいようだ。そのせいか、県外の方に「げんしゅせいさんぶ」と伝えると、「秋田県」→「お酒」を連想するようで、「原酒生産部」と勘違いされることが少なからずある。

残念ながら美味しい仕事ではない。種子を播かなければ収穫物は得られないので、種子は農業の根幹と言われる由縁であり、農業者の需要に応じた種子を毎年供給しなければならないので生産する側の責任は重い。田植え後の水田風景を目にしてると一先ず安心する。

これまで、仕事上で女性であることを意識することはほとんどなかったように思う。また、育児、介護でも弱音を吐きそうになった場面は数々あったものの、実家の両親、親戚、ご近所さん、友人総動員で乗り切ったつもり

でいた。

ところが、25歳になる娘が久々に帰省した折り、結婚しても続けられる職種は何かを話し合っていると、突然20年以上前のことと言이出した。

「小さい頃に熱をだした時、車に布団ひいて寝かされてどこかに連れて行かれた。熱くて苦しかったし、知らない人が車の窓の隙間からのぞき込むので怖かった。私は今でも時々思い出すけど、お母さんのことだから覚えてないよね。」

急場をしのぐため、発熱している幼児を車に乗せ、職場の駐車場に止めてから、用事が済むまで車内にじっとしているように言い聞かせた時のことを記憶していたのだ。無理がたたって完治に1ヶ月かかったことは娘には伝えていない。

本当はこれだけではない。できる範囲で最大限努力をしたことを言い訳にして、子供たちにしわ寄せしてきたことは他にもいろいろある。痛いところを突かれた思いがした。

女性の就労や昇進を後押しする制度はさらに充実すると思われる。これを追い風に女性の活躍の場が広がることを期待している。でも、仕事を優先しがちになった時は、自分より弱い者がいることを思い起こし、ワークスタイルを微調整することも必要である。

[2015.9]

方法論としての フェミニズム

し むら しょう こ
志 邑 匠 子

●秋田公立美術大学
美術学部 美術教育センター 教授



Researcher

勤務先の秋田公立美術大学では、学芸員養成に関わる科目と美術史を担当しています。専門は日本近代美術史です。

出身大学の文学部全体の男女比は、在学当時 1:1 でしたが、私が学んだ美術史専修では、女子学生が男子学生をはるかに上回っていました。大学院でも、女子の方が多いのですが、大学教員としての研究者の数は、近年では女性も増えているといえ、トータルでみると男性の方が圧倒的に多いでしょう。これは他の研究分野においても言えることです。

趣味的なイメージを抱かれがちですが、学問としての「美術史」は歴史研究です。1990 年代、美術史の新しい方法論として、欧米のニュー・アート・ヒストリーが紹介され、「ジェンダー」や「フェミニズム」について、活発に議論が交わされました。その分野で論陣を張っていたのは、私よりも年長の女性研究者たちです。彼女たちにとってフェミニズムは、研究の方法論であり、同時に女性研究者としてのスタンスの表明でもありました。大学院生だった私

も、新しい方法論に刺激を受け、吸収しようとしました。方法論としてのジェンダー やフェミニズムは、他のセオリーと同様に、研究対象によっては有効です。しかし私は結局、その方法論が最適だと思える研究テーマを選択することはありませんでした。当時の私には、先輩女性研究者たちのようなリアリティがなかったからだと思います。そう思えたのは幸いなことかもしれません。しかし、だからこそ、私たちの世代は、「方法論」としてのフェミニズムやジェンダーを、客観的に議論できるようになったとも言えるのです。そうでなければ、男性研究者はフェミニズムを論じることはできることになります。

誠実な研究姿勢は、男女を問わず、着実に成果を生みます。女性であることを過度に意識することなく、研究に真摯に向き合うことのできる環境づくりが必要だと思います。

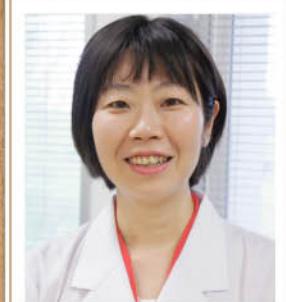
[2015.10]

研究支援員制度についての インタビュー

Vol.1

もり い ま や こ
森 井 真也子

● 秋田大学医学部附属病院
小児外科 助教



Researcher

女性研究者が出産・育児・介護等と研究活動を両立できるよう支援するために、女性研究者支援コンソーシアムあきたでは大学院生又は学部学生を研究支援員として採用し配置する「研究支援員制度」を実施しています。ワーク・ライフ・バランス実現のために、この制度を利用されている秋田大学の研究者と支援員の方へのインタビューをご紹介します。

■ 研究支援員制度(以下「制度」という。)を利用しようと思ったきっかけは何ですか。

臨床の業務をしながら実験をする中で、緊急の症例があつたり、また子供や高齢の祖父母が同居していますので、熱を出したり怪我をした時などに家に戻らなければならないなど、どうしても自由にならない時間があります。培養細胞の世話や実験を途中で止めることが出来ないので、手伝ってくれる方がいたら助かるなと思っていた時にちょうど研究支援員の募集がありました。フルタイムとはいかなくても、短い時間で何かあった時にすぐに手伝ってくれる方がいると非常に助かります。

■ 制度を利用した感想を教えてください。

修士課程で研究をされていた方にお願いしているので、学生みなさん優秀で研究の助けになって下さっているのでとても助かっています。

研究支援員の方に来てもらえる時間が短

いので、どうしてもお願ひできる仕事に制約がありますが、学部の学生さんだということが非常にいいと思います。授業の後そのまますぐに来ていただけますし、仕事の手伝いをお願いしていたのに私が実験室に行けないような時も、そのまま勉強をしてもらうなど支援員さんの時間をあまり無駄にせずに済みますのでとてもスムーズです。

■ トロントご留学時に当制度について現地の方にご紹介頂いたとお聞きしましたがその時の現地の方の反応や感想を教えてください。

It's wonderful! と言っていましたね。似たような制度はトロントにはなかつたと思います。

それぞれの研究室で実験助手さんを雇つたりしているのですが、人ひとり雇うとお金がかかるので、私が通っていた研究室にも最初テクニシャンはいなかつたですね。そちらの研究室のラボマネージャーさんが3人の子育て中の女性でしたが、あまりにも負担が大きいということで、私が帰国す

る4カ月前くらいに修士を出て就職する前のテクニシャンの女性を雇っていました。その時に、この制度の話をしたら「それは素晴らしい制度だ」と褒められました。

■ 研究支援員の方にはどのようなメリットがあると思いますか。

去年の話になりますが、女性の方に手伝いに来ていただいていたので「医師になつてからも研究できますか」「家庭があつてもやりたい仕事を続けることができますか」など聞かれたことがあったので、将来を考えるうえでロールモデルを知ることが出来るというメリットがあるのでは



はり
堀
やす
恭樹
秋田大学医学部医学科
研究支援員

■ 研究支援員になったきっかけは何ですか。

元々研究室を探していて、どういった研究テーマがいいか考えていた時に、たまたま研究支援員のお話をいただきました。研究内容をお聞きした時に非常におもしろいなと思い、森井先生の下で勉強できることがあるのではないかと思いお願いしました。

■ 研究支援の内容を教えてください。

僕の仕事は先生がお仕事でお忙しい時のサポートが主です。

具体的には、遺伝情報の解析を行う事を最終目標とし、患者さんの血液等から遺伝子を取り出す作業とそれを行うにあたって必要な種々の作業のお手伝いをさせていただいている。また実際に手を

ないでしょうか。研究の勉強にもなればいいなと思っています。

また、医師としての仕事を続けながら、新しい治療法の開発のために臨床だけではなく、研究を続けていくことが大事だと思っています。大学のこの制度を利用する事によって、研究を中止することなく続けていく姿を学生さんに見てもらえることもメリットだと思います。

■ 今後制度の利用を考えている方へメッセージをお願いします。

私の周りでも仕事をしながら子育てをしていて、研究をする時間がなかなか取れないという方もいらっしゃるので、積極的にこういった制度を利用することで、やりたいことを諦めずに続けることが出来るのではないかと思っています。

動かすだけではなく、対象としている疾患の基礎的な情報から最新の論文まで、様々なデータ収集のお手伝いもさせていただいている。

■ どのくらいのペースで研究支援員の活動をしていますか。

何をやるかによりますが、大体月に26時間程です。論文1本読むにもそれなりに時間がかかりますし、プライマーを設計するにも試行錯誤することがありますので。



■ 研究支援を行った感想を教えてください。

3ヶ月程活動をしていますが、メリットがあると感じています。森井先生は実験が非常にお上手で、見習う部分が非常に多いです。私が、将来医師として働きながら、研究をしていこうと考えた際に、実験の手技やスケジューリングなどは学ばなくてはいけない事なので、このプログラムは非常にためになっています。

[2015.10]

研究支援員制度についての インタビュー

Vol.2

おお と たか よ
大 戸 貴 代

● 秋田大学大学院医学系研究科
医学専攻 生体防御学講座 助教



Researcher

■ 研究支援員制度(以下「制度」という。)を利用しようと思ったきっかけは何かですか。

研究支援員の五十嵐さん、佐藤さん(当時医学部・学部生)とともに、支援員となるまえから同じ研究室に所属していました。佐藤さんの場合は学部生の頃から基礎研究のことを学びたいということで出入りをしていて、一緒に実験をすることもありました。そんな時に研究支援員の募集があり、せっかくならばこの制度を利用した上で、どうしても時間が作れない時などに、色々と手伝いをしてもらいたいと思ったことがきっかけです。

■ 制度を利用した感想を教えてください。

大変いい制度だと思います。この時間は私のために時間を作つてお手伝いしてください



さいということをこの制度があるおかげで気兼ねなく頼むことができました。この制度によって円滑に実験を進めることができたので非常にいい制度だと思いました。

■ 研究支援員の方にはどのようなメリットがあると思いますか。

五十嵐さんは博士課程の学生なので自分の研究テーマを持って研究を進めていました。研究支援員として、私の研究に携わつてもらうことで、自分のテーマ以外の研究に足を踏み入れて考察する機会が得られ、結果として色々と勉強になったのではないかと思います。そういう点で、メリットがある制度だと思います。

■ 今後制度の利用を考えている方へメッセージをお願いします。

本制度を利用する研究者だけでなく、支援員となる学生さんにとってもメリットがある制度だと思いますので、支援員制度の利用を考えている研究者のテーマに興味がある学生さん、もしくは研究を手伝ってくれる学生さんがいる場合はぜひ利用してみると良いのではないかと思います。



五十嵐 秀光
秋田大学大学院医学系研究科
医学専攻(現歯科口腔外科学)
研究支援員

※平成27年9月30日をもって研究支援員終了

■ 研究支援員になったきっかけは何ですか。

私は博士課程の大学院生として4年ほど前からこちらの研究室に所属しており、今年の3月まで自身の研究テーマに関する実験を主に行っていたため、大戸先生とともに実験を行う機会を持つことができませんでした。そんな時、大戸先生の出産・育児などの理由からこの研究支援員制度のお説明を頂きました。

■ 研究支援の内容を教えてください。

大戸先生が一人で行うには時間がかかり過ぎる実験の代行や、緊急で別の

実験を行う必要がある時の実験代行が主になります。

■ どのくらいのペースで研究支援員の活動をしていますか。

自分の実験の合間も含めて可能な限りお手伝いをしています。



■ 研究支援を行った感想を教えてください。

大戸先生の実験については、週に1回の研究室内もセミナーで話を伺っていましたが、実際に一緒に実験を行いますと、大戸先生の実験手技や研究に関する考え方などを教授して頂くことができ、非常に参考になり勉強になりました。





ロールモデル



No.01

疑問を追究できる研究者 という仕事

[2014.4]

ふく やま まゆ こ
福山 瞳子

秋田大学

大学院工学資源学研究科 附属理工学研究センター 助教



Researcher

プロフィール

熊本大学大学院修了（博士：理学）→産業技術総合研究所勤務（3年）→台湾中央研究院地球科学研究所勤務（3年10ヶ月）→秋田大学赴任

■ 研究内容を教えてください

地球上に存在する資源、そして現在の環境は、元素間の相互作用によって成り立っています。そこで、私は、元素の相互作用という視点から、岩石学と地球化学的手法を用い、地球における物質循環について研究を行っています。

■ 進路を決定したきっかけや今の研究をしようと
思ったきっかけがありましたら教えてください

研究者になったきっかけは、大学で卒業研究を始めて学んでいくうちに、「研究はこれまで分かっていないことが解明できて面白い」という気持ちになったことです。海外での研究生活を経験したいという理由もあり、台湾中央研究院を選択しましたが、台湾での研究生活では専門分野を広げることができ、今の研究テーマに繋がっています。私にとっては、言語や文化の異なる環境の中での研究生活ということもあります。貴重な経験となりました。

■ 仕事と生活を両立するために実践している事、心がけている事はありますか

ワークライフバランスについては、まだ模索しているのが現状です。私は仕事だけに集中しがちになるので、意識してプライベートの時間（週末や冬期休暇等）を作り、

バランスのよい生活を過ごせるように心がけています。

■ 研究者を目指す女性大学院生・学部生の皆さんへメッセージを一言お願いします

研究者は、正確な知識と技術、論理的な思考を活かして、未知なることを明らかにしていく職業です。国際的な視野と語学力は必須となります。国内外を問わずに働く職業というのも素敵な面ではないでしょうか。研究を続けていると困難なときも訪れると思いますが、研究が好きでそのためには努力を厭わないという気持ちと実行力があれば、乗り越えられると思います。



ルーペです。拡大倍率が10倍の小さな物ですが、野外や実験室内で岩石を観察する時だけでなく、分析試料の状態を確認する等、様々な用途に使えるので研究生活に欠かせません。いつも手元に置いてあります。

No.02 家族の支えで頑張っています ～子連れカナダ留学～

もり
森
い
ま
や
こ

秋田大学医学部附属病院
小児外科 助教



Researcher

プロフィール

国立秋田大学卒→卒業と同時に結婚→秋田大学へ勤務→秋田大学大学院卒→現在はカナダのトロント大学に留学中、3人の子どもを育てながら働いています。

研究内容を教えてください

生物細胞において行われている、様々な原因で発生するDNA分子の損傷を修復するプロセスについて研究しています。

進路を決定したきっかけや今の研究をしようと思ったきっかけがありましたら教えてください

小学校の理科の先生が座学ではなく実験（酸性・アルカリ性で液体の色をかえたり、ミョウバンの結晶を作ったり、水素を作つて燃やしたり）を中心に授業してくださいました。何が起こっているのか知りたい！と思ったことが理系を選んだきっかけだったように思います。医師になってからは、職場の上司の「教科書に書いてあることの半分は間違っている」という言葉に触発され、本当のことが知りたいと研究を続けています。

仕事と生活を両立するために実践している事、心がけている事はありますか

家族にちゃんと3食食べさせることを心がけています。カナダでは日本食を料理することに工夫が必要なので仕事以外の時間はほぼ買い出しと料理をしています。（昨日はきりたんぽを焼きました！）

カナダにおけるワークライフバランスについて感じた、体験したというエピソードがあれば教えてください

カナダも日本もワークライフバランスは人それぞれあまり変わらないと感じてい

ます。ただ、男女差という意味では、カナダの方が自由な印象があります。小学校は3時半に必ず迎えにいかなくてはいけないのでですが、半分は男性が迎えに来ています。女性が働きやすいというよりも、男性が家庭を大切にしやすい雰囲気だという印象が強いです。

研究者を目指す女性大学院生・学部生の皆さんへメッセージを一言お願いします

進路決定では自分が楽しい、やりたいと思う気持ちを大切にされるのがいいと思います。



大学院で直接実験を指導していただいた先生に資（試）料整理の大切さを教えていただきました。いわく「必要な試料は5分で出せるよう」とのことでした。私たちの分野では大抵の試料をプラスチックのチューブで保存しますが、これは100度のボイルから-70度での保存、-196度の液体窒素による凍結とかなり過酷な扱いを受けます。こちらのペンではすぐに文字が消えてしまうため、日本から大量に取り寄せました。気が付くと他の人の机に移動しているので、しっかり名前も書いています。

No.03

分野を超えて、いろんな人と繋がれる研究者

[2014.6]

なかじまさわこ
中島佐和子

秋田大学
ベンチャーアンキュレーションセンター 助教
(現大学院工学資源学研究科 情報工学専攻 助教)



Researcher

プロフィール

国立大学東京工業大学卒→東京工業大学大学院修士課程卒→東京大学工学系研究科博士課程卒→慶應義塾大学へ勤務→東京大学へ勤務→秋田大学へ勤務→結婚と出産→現在は子ども（女児）を育てながら働いています。

■ 研究内容を教えてください

修士課程までは物理化学や計算機化学の研究をしていましたが、「社会的マイナリティに向けた工学研究」という分野の創造性の豊かさ出会い、博士課程からはバーチャルリアリティや福祉情報工学の研究に進みました。その後、映画製作者や障害当事者や支援者の方々との出会いをきっかけに、現在は、映画や映像のバリアフリー化に関する研究を遂行中です。日常生活を豊かにし文化的な活動を行う上で、映画やテレビ鑑賞は欠かせません。しかし、加速する少子高齢化社会を背景に、身体特性の多様化が進む一方で、聴覚や視覚に不便を感じる方々が映像コンテンツを自由に鑑賞できるシステムは充分に整備されているとはいません。映画や映像鑑賞のバリアフ

リー化への障害当事者からの期待は非常に高く、高齢者や障害のある人たちへの情報保障という観点も含めて、その実現がいち早く望まれています。障害のあるなしに関わらず誰もが映画や映像を楽しむ社会を構築するために、聴覚障害者の映画鑑賞に関する実態調査や字幕内容に関する評価を行うと同時に、字幕制作技術や字幕提示技術の開発とその社会化を進めることで、新しいメディア体験の実現に繋げたいと考えています。

■ 進路を決定したきっかけや今の研究をしようと思ったきっかけがありましたら教えてください

学生時代は春休みや夏休みを利用して旅をすることが大好きでした。ちょうど修士課程の卒業時期に行ったメキシコへの旅がきっかけで、博士課程での研究テーマやその後の進路を決定したように思います。先住民やその他の多様な文化をもつ人々が混じり合ったミクスト・カルチャーな世界に触ることで、日本では気づくことができなかつた社会の問題やそれを生きる力に見えるようなパワーみたいなものを感じ、現在に繋がる「研究を通じた社会へのアプローチ」の根っこのようなものができたと



思います。その後、博士課程を修了しポスドクになる段階で、映画のバリアフリー化というテーマを通じて、科学や研究という枠組みを超えた様々な人たちと出会いました。社会的な課題を顕在化し、いかにクリエイティブな解決策をもって未来を創っていくかというスタンスと方法論に大きく触発され、現在への道を決定づけたように思います。この2つの経験が今の研究に繋がっています。

■ 仕事を生活を両立するために実践している事、心がけている事はありますか

子どもが生きてからは仕事と生活のスタイルが大きく変わりました。それまでは、自分の時間が100%でしたが、今は子どもと何をしたら楽しいかという視点で生活を創っていくようになりました。現実的には仕事に没頭できる時間は減りましたが、子どもとの体験は仕事と生活を両立する上でよい刺激になっていると思います。特に休日は、「子どもと一緒に今だからできること」をキーワードに、今まですることのなかつたことを子どもと探しながら気分をリフレッシュしています。最近では、秋田の魅力を大発見するのが楽しいです。また、ポスドクの時代に同じ大学で知り合った女性研究者7名で研究ユニットを作って活動しています(CHORDxxCODE)。それぞれの専門性を活かして相互に刺激し合いながら、ひとりではできないことをやっています。その活動はいつも、自分の仕事と生活に大きな刺激を与えてくれる大切な存在です。

研究者を目指す女性大学院生・学部生の皆さんへメッセージを一言お願いします

女性は出産なども考えると、男性に比べて明確なキャリアパスを設計することが難しいかもしれません。ただ、こうした現実をある種の「自由」と捉えて、その状況を活かして発想を広げていけば、新しい視点で今までにないことに出会えると思います。これからは女性の生き方はますます多様化して、いろいろな課題や可能性が見えてくると思います。学生の間は「自分の好きなことやこだわり」を見つけることいいのではないでしょうか。そして将来、それを手掛かりに世界を広げて行ってください。



No.04

「好き」や「得意」を大切に

[2014.7]

まつ もと な ほ
松 本 奈 緒

● 秋田大学
教育文化学部 教育実践講座 准教授

プロフィール

お茶の水女子大学文教育学部舞踊教育学科卒→筑波大学大学院博士課程（5年一貫）単位取得満期大学→東京福祉大学へ勤務→秋田大学教育文化学部へ勤務（途中、大学の研究支援制度で米国での8ヵ月の在外研究）→現在は単身で体育科教育、舞踊教育学の教育、研究に従事しています。平成25年度秋田大学優秀女性研究者賞受賞。

■ 研究内容を教えてください

大きく分けて3つあります。モーションキャプチャ技術を利用した舞踊の学習支援装置の開発と教育効果について、アメリカのムーブメント教育のカリキュラムとその教育効果について、現職教員のダンスの意識調査や教育実習における省察等教員養成についてです。はじめのテーマは工学資源学部の玉本教授や三浦准教授との共同研究で行つたものです。モーションキャプチャを用いて秋田の盆踊りの熟練者データと学習者のデータをリアルタイムで比較し、どこがどの程度異なっているのか分かる装置を開発し、学生を対象に大学の授業で実施しその効果を調査しました。2点目は大学院時代から行つてきているテーマであり、身体



の基礎感覚をつくるアメリカの小学校体育プログラムについて、そのカリキュラム構造の特徴やプログラムについて研究を行っています。これは現在「動きのぎこちなさを改善する運動教材の開発」というテーマで科学的研究補助金をいただいて研究を続けています。3点目は自分の専門とするダンス領域の授業実施について中学校現職教員がどのような問題意識を持っているのかアンケート調査を行い、また、教育実習生がどのような視点を持って教育実習を振り返っているのかまとめています。

■ 進路を決定したきっかけや今の研究をしようと思ったきっかけがありましたら教えてください

幼少の頃からダンスが好きで、ダンスに何らかの形で一生関わっていきたいと思い今の仕事を選びました。大学で職を得る大変さに躊躇した時に、同業の母から「大学の職は一国一城の主みたいな所あるからね。」と声をかけてもらいました。専門家として自分の仕事を自分の責任で行う、仕事（研究）の目標も自分で決定し自分で達成していく、そういう大学職の特徴に魅力を感じています。

■ 仕事を生活を両立するために実践している事、心がけている事はありますか

研究者としてのやるべきことを優先するとどうしても一斉休業や週末の休暇の時間用いて研究作業をすることになりますが、研究のまとめや学会発表前でない余裕のある時期にはゆっくり休養をとること、栄養価の高い食事をとること、気分転換に景色のいい所にでかけるようにしています。また、秋田に赴任してから、社交ダンスをはじめたのですが、週に何回かの練習とたまに週末に開かれるダンスパーティーに参加しています。身体を健康的に動かしたり、仲間との交流を楽しんだり、パートと明るい音楽に合わせて踊ることでストレスが発散できたりできるところがよいですね。社交ダンスを始めてから、オンとオフの切り替えができる、仕事や研究にも勢いがついてきた気がします。



研究者を目指す女性大学院生・学部生の皆さんへメッセージを一言お願いします

これが好き、これが得意、これに興味があるという気持ちを大切にして下さい。その延長線上に長い間追っていきたい研究テーマや自分のプロジェクトがあると思います。



英語圏の研究をしているので、必須です。大学院時代の恩師に「分厚い辞書を使いなさい」と言われたのですが、これには小学館のランダムハウス英和大辞典（32万4千語収録）が入っています。在外研究の際にも持っていました。

No.05

いろんな巡り会いに恵まれて

さとう ながさわ なみこ
佐藤（永澤）奈美子

●秋田県立大学
生物資源科学部 生物生産科学科 准教授



Researcher

プロフィール

東京大学大学院修了・博士号取得直後に結婚→アメリカ・コールドスプリングハーバー研究所で勤務（ボスドク）（5年半）（長女出産）→秋田県立大学で勤務（長男出産）→現在は2人の子どもを育てながら働いています。

■ 研究内容を教えてください

植物が生きていき、その形を決めるときには、数多くの遺伝子が働いています。その遺伝子の中でも、他の多くの遺伝子が働くかどうかのスイッチを入れたり切ったりする、「偉い」遺伝子を見つけて、解析していきたいと思っています。その出発点は、生長の「バターン」が変わった突然変異体（遺伝子がひとつ壊れた個体）を見つけることです。秋田でそんな突然変異体を探し始めて数年たち、やっととつておきの突然変異体（イネ）に巡り会えたところです。

■ 進路を決定したきっかけや今の研究をしようと思ったきっかけがありましたら教えてください

大学に入ったときは気象学志望でしたが、大学の物理学、数学に挫折。休日に実家の農作業を手伝っていて、心と農学部に興味を持ち始めました。研究室訪問の際、「つまんなかつたらやらなくていい」（無理矢理研究させる気はさらさらない）と言い切った教授の研究室に、何となく惹かれて入り、そこで今の研究の基礎を学びました。実際、その研究室では、みんな面白いと思って研究に打ち込んでいて、イネのいろいろな突然変異体と出会い、戯れながら、とても楽しい研究生活を送ることができました。

■ 仕事と生活を両立するために実践している事、心がけている事はありますか

仕事と生活、いずれにも、さくことのできる時間は限られているので、できる限り密度を濃くしようと思っています。が、「できる

限り」が原則なのに、しばしばできない分量詰め込んでしまい、そんなときは主人（秋田県立大学准教授）がことごとくフォローしてくれています。

■ 研究者を目指す女性大学院生・学部生の皆さんへメッセージを一言お願いします

1. まずは、自分のやりたいことを一番大切にできる時代を大切に。
2. 私の幼稚園には男の先生はいませんでしたが、息子の幼稚園にはいらっしゃり、息子は一緒に遊ぶのが大好きで、先生のことをとても尊敬しています。幼児の遊び相手はやはり女の先生の方が良いのでは？なんて思っていたのでちょっと驚きました。そんな体験から、職場に、性別も含めいろんな人が集まる、いろいろな視点が得られ、長所は高め合い、短所は補い合っていけるのではないかと、漠然と思っています。研究が大好きな皆さんが、皆さんを理解してくれるパートナーに恵まれ、研究界での男女比に関係なく研究を楽しみ、個性を光らせていかれるのを切に祈っています。まだまだ駆け出しの自分も、いつか皆さんと一緒に研究の世界で個性を光らせることができるよう、精進したいと思います。

田んぼ



マストアイテム
皇冠

突然変異体探しに必須です。
子供達の遊び場にもなったりします。

No.06 研究のヒントは 身近なところにも！

●秋田大学

大学院工学資源学研究科 情報工学専攻 講師

いし
石
さわ
ちかこ



Researcher

プロフィール

国立秋田大学卒→民間会社へ勤務→秋田大学へ勤務→結婚と出産→秋田大学大学院修了（博士：工学）→現在は子どもを育てながら教育・研究に従事しています。

■ 研究内容を教えてください

大きくわけて2つあります。

1つ目は、USBメモリからの情報漏洩を防止するために、使用したコンピュータからログ（使用履歴などの情報）を収集し解析する研究を行っています。

2つ目は、コンピュータ・ディスプレイ上に表示される画像の不正コピーを防止する手法について研究しています。例えば、「赤と緑の色が高速で切り替わって表示されると黄色が知覚される」といった人間の視覚特性を利用し、オリジナルと同様の色の画像を擬似的に表示する方法などを検討しています。

どちらも情報セキュリティに関する研究ですが、「つい、うっかり誤操作をしてしまった」というようなヒューマンエラーの防止や視覚特性の利用など、ヒトを中心に据えた情報処理技術を考えています。

■ 進路を決定したきっかけや今の研究をしようと思ったきっかけがありましたら教えてください

学部では物性工学を学んでいましたが、4年生のときに研究室の先生からコンピュータの使い方を教えていただいたことがきっかけで、ソフトウェア会社に就職しました。はじめは、プログラムが上手く作れず苦労しましたが、先輩から「コンピュータのプログラムも人間も一緒。相手の立場になって考えてみたら？」というアドバイスをいただき、ようやく作れるようになりました。プログラムは良くも悪くも作られた通りに動く素直な性格の持ち主であるということを理解できた一場面でした。

また、出産後、自宅のコンピュータを使って安全にデータ解析などを行いたいと思った

ことがきっかけで、USBメモリからの情報漏洩防止の研究をはじめました。同じ研究室の先生達が「おもしろい」と言ってくださったことが私の大きな原動力になっています。

■ 仕事と生活を両立するために実践している事、心がけている事はありますか

毎朝、その日の仕事の流れと家族のスケジュールを確認し、時間の使い方や優先順位などを頭の中でシミュレーションしています。また、職場でも自宅でもスムーズに事が運ばれるよう、隙間時間を利用してこまめに準備を進めることを心がけています。

■ 研究者を目指す女性大学院生・学部生の皆さんへメッセージを一言お願いします

学部から大学院にかけての時期は、様々なことに没頭できる貴重な時間だと思います。将来、異なる研究分野に進んでも、この時期に経験したことや努力したことが必ず皆さんの役に立つと思います。研究のことだけに偏らず、色々なことにチャレンジして欲しいです。



付箋でも裏紙でも、書くことができれば何でもOKです。思いついたことを直ぐに書きとめられるように、職場でも自宅でも常備しています。最近では、子どももメモ魔になりました。

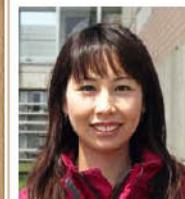
No.07

失敗を楽しもう！

[2015.1]

いの うえ
井 上 みづき

● 秋田県立大学
生物資源科学部 生物環境科学科 助教



Researcher

プロフィール

京都大学卒→京都大学大学院修了（博士：農学）→京都大学で雇われPD→秋田県立大学勤務→遠距離婚で1人の子どもを育てながら働いています。

研究内容を教えてください

植物を材料とした基礎生態学と保全生態学的研究に取り組んでいます。

1つめの基礎生態学的研究は、クローナル植物の生活史特性を解明するものです。とくに有性繁殖（種子繁殖）とクローン繁殖（ササの地下茎やヤマノイモのムカゴなどが該当）の繁殖様式の進化について考察しています。

2つめの保全生態学的研究では、シカの過採食で下層植生が劣化した森林の生態系機能の回復試験をしています。1集水域をシカが入れないように柵で囲った試験地を作り、植物の種多様性や水質、昆虫相がどのように変化するのか明らかにしています。

進路を決定したきっかけや今の研究をしようと思ったきっかけがありましたら教えてください

生物学を志した理由は、高校生物でクラゲの生活史の「クローン」ができるメカニズムに驚いたからです。そのころからなんとなく「クローン」に興味がありました。

研究者でやっていこうと思った理由は、直接的には、修士2年で就職活動に失敗したことですが、大学内外の先生方のご指導のおかげで研究の楽しさに目覚めることと学術振興会でDC2に採用されたことが縁だと思います。

仕事と生活を両立するために実践している事、心がけている事はありますか

心がけているのは、子と私双方の健康と精神的安定が仕事に集中するための近道である

という認識、また、離れて生活している夫に対し、ハウレンソウ（報告・連絡・相談）を忘れず感謝の気持ちをもつこと。最後に、私の仕事と育児の両立サポートのために秋田まで引っ越しして来てくれた両親には感謝してもしきれません。

研究者を目指す女性大学院生・学部生の皆さんへメッセージを一言お願いします

研究者というのは新しい発見を重ねたり、新たな理論を構築していく開拓者だと思います。ですから、私生活でも常識にとらわれず、マイペースにアップダウンを楽しみつつ、自分らしい生き方を追求していけばいいのではないかでしょうか。

ちなみに、私が所属する日本生態学会・日本森林学会・種生物学会の全国大会には毎回、託児所が設置されます。若手研究者に優しい学問分野だと思います。

長靴

マスト アイテム

野外調査の必需品です。地下足袋や胴長・登山靴のこともあります

No.08 スロースターターでもそれなりに。

●秋田大学医学部附属病院
精神科 助教

筒 い こう
井 幸



プロフィール

秋田大学医学部卒業→秋田県内の総合病院でずっと臨床→久々に秋田大学に戻ってきた際にたまたま現在の研究内容にめぐりあう→金沢医科大学総合医学研究所→秋田大学

■ 研究内容を教えてください

精神症状を生じる身体の疾患、とくに自己免疫性の脳炎を研究しています。

2007年に発見された抗NMDA受容体脳炎という病気は、その症状や経過が、精神科領域で従来いわれていた「悪性（致死性）緊張病」と呼ばれていたものとほぼ一致することが分かりました。

これを契機とし、ごく一部ではありますか精神科疾患の患者さんの中に実は身体疾患だったケースがあるということが判明しました。

現在、この疾患を診断しながら症例を集めているところです。

■ 進路を決定したきっかけや今の研究をしようと思ったきっかけがありましたら教えてください

元々臨床指向が強く、研究向きの能力がないことも分かっていたため、研究する気は全くありませんでした。このため、総合病院の精神科を主に選んで働いている中、今研究している疾患の秋田県最初のケースの入院をたまたま担当することになりました。そこから少しづつ臨床研究に興味が向かい、金沢医科大学で細胞培養などを勉強させて頂き現在に至ります。

ですので、本格的に研究を手がけるようになったのはこの数年で、研究者としてはスロースターターです。当初は基本的なことも分からぬような状態でしたが、金沢医科大学の総合医学研究所、本学の情報制御学・実験治療学講座及び精神科医局の皆様にご指導頂き、支えられ、研究を続けております。未だに手探りで臨床の合間に研究という感じですが、少しづつでも新しいことを見つけていければ

と思っています。

■ 仕事と生活を両立するために実践している事、心がけている事はありますか

どうしても仕事に偏りがちなので、きちんと休む日を作るようにしています。

休日は臨床のことも研究のことも考えないようにして、オンとオフをなるべく区切るようにと思っています。

■ 研究者を目指す女性大学院生・学部生の皆さんへメッセージを一言お願いします

研究の内容を問わず、英語の勉強はしっかりとやっておきましょう。

国際的な発表の場に出るだけでなく、最新の論文や研究をしっかりと把握するためには英語の能力は必須です…と、リアルタイムで苦労しているのでお伝えしておきたいです。

また、例え研究のスタートが遅くても、やる気次第で道は拓けます。興味を持てる分野にめぐりあえることもひとつのご縁だと思いますので、大事にしてください。



No.09 家族に支えられて

[2015.5]

さとうりえ

● DOWA メタルマイン株式会社
製錬部 製錬技術研究所 秋田駐在
(現秋田製錬株式会社 生産管理部) 主任研究員



Researcher

プロフィール

秋田大学卒業 → 秋田大学大学院修了 → H19年に秋田製錬株式会社に入社(現在は製錬技術研究所に出向中) → H22年に結婚 → H25年に出産(産前産後休暇、育児休暇を取得) → 現在は育児をしながら勤務

■ 研究内容を教えてください

新規技術開発や操業改善の研究を行っています。これまでに操業現場へのICP導入や製品亜鉛の品質向上の為の基礎試験等を実施しました。ICP導入では工程液の分析結果がすぐに得られるようになり、異常発生時に素早い対応をすることができるようになり、操業の安定化につながりました。

製品亜鉛の品質向上では電解採取用のアノードを改良し、Pbの溶出を防ぐことで亜鉛を取り込まれるPbが低減し、高純度のZnを製造することができるようになりました。

現在は電力コスト削減や生産量アップの為の基礎試験を実施しています。

■ 進路を決定したきっかけや今の研究をしようと 思ったきっかけがありましたら教えてください

高校時代、進路面談の際に担任の先生から、「工学系に進学するのであれば、最終的には大学院進学も検討しておいた方がいいよ」と言われました。

いざ、大学に進学し、研究を続けるため進学を両親に伝えた際、当時の担任の先生の言葉を両親も覚えていてくれて、すんなりと承諾してもらうことができました。

■ 仕事と生活を両立するために実践している事、心がけている事はありますか

子供が生まれ、仕事・家事・育児と、今まで以上にやることが増えました。

全部完璧にこなすのは負担が大きすぎるんで、手を抜いても構わないところは手を抜いています。

また、平日はどうしても仕事中心の生活になりますので、休日はできるだけ家族との

時間を大切にするようにしています。

仕事復帰に伴い子供が保育園に通い始めた途端、熱を上げたり、手足口病等の感染病をもらってきたりと毎週のように病院に通う時期がありました。

私の場合は、すぐ近くに夫の実家もあり、義父母に預かってもらうことができる環境がありました。

今、仕事と生活の両立できているのは家族の支えがあるおかげです。

■ 研究者を目指す女性大学院生・学部生の皆さんへメッセージを一言お願いします

何事も失敗を恐れずに挑戦することが大切です。失敗して後悔するより、何もしなくて後悔するほうが後々、「なんであの時やらなかつたんだろう」と重くのしかかってきます。

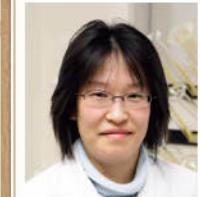
この先、選択を迫られる場面は多々あると思います。やるか、やらないかで迷った場合は失敗を恐れずに挑戦することをお勧めします。



マイボトルとお菓子です。
疲れた時には少し休憩を取り、その時の気分でコーヒー やお茶を飲み、甘いものを食べ、気分転換しています。少しの休憩を入れるだけで、頭がすっきりし、作業効率があがります。
机の引き出しには常にお菓子がストックされています。

No.10

何やかや言って、最後に 重要なのは「根性!!」です

ふじ
藤 た な お こ
田 直 子●秋田県立大学
生物資源科学部・生物生産学科 教授

Researcher

プロフィール

大阪女子大学卒→大阪府立大学大学院卒→(独)農業生物資源研究所でポスドク→秋田県立大学へ勤務→3年後に結婚→現在に至る。

研究内容を教えてください

お米の澱粉の研究をしています。お米の中で、澱粉がどのように作られるかを知りたいと思い、研究過程で作った変異体米（ある特定の遺伝子が壊れたイネ）を調べているうちに、普通のお米とは全く異なる澱粉を種子に貯めるものがあることが分かつてきました。この中には、消化しにくい澱粉を大量に貯めているものもあり、ダイエット米への実用化を目指しています。

進路を決定したきっかけや今の研究をしようと 思ったきっかけがありましたら教えてください

もともと、文系科目が苦手だったこともありますし、理系しか選択肢はありませんでした。高校くらいから漠然と研究者になりたいと思っていましたが、進学した大学は当時、大学院が無く、時代が好景気だったことから、そのまま学部で就職しようかな、と思った時期もありました。しかし、卒論が始まったころから、自分が実験が大好きであることを自覚し、他大学の大学院への進学を決意しました。学部では動物（ヒト）をやっていたのですが、大学院からは、植物へ転換しました。大学院時代は、「研究」と「教育」の両方ができる職業に就きたい、と思うようになりました。しかし、なりたいと思ってなれる職業ではないので、とにかく強い思いを抱いたまま、その場その場でやるべきことを全力でやろう！と開き直っていました。幸運にも秋田県立大学が新設されると同時に、助手として着任することができました。

仕事と生活を両立するために実践している事、心がけている事はありますか

結婚するまでは、家には寝に帰るだけの生活だったので、結婚してからは、せめて

朝ごはんと夕ご飯は夫と食べないと結婚した意味がないと思い、そうなるように努力しました。しかし、これまでよりずっと家に早く戻り、夕食を作る、という生活が最初は苦痛でなりませんでした。独身時代の仕事時間を結婚したことで減らすのが極度に嫌だったからです。そこで、生活スタイルを全く変えました。すなわち、家には早く帰り、夕食を作り、片づけが終わった後、家で残った仕事をする、というスタイルです。これに慣れるのに3年くらいかかりましたが、若いころより仕事効率も上がり、妥協することも覚え（笑）、夫の協力もあり、現在はストレスなく、過ごすことができています。

研究者を目指す女性大学院生・学部生の皆さんへメッセージを一言お願いします

自分がなりたい将来像を明確にし、強く思い続けてください。そして、チャンスが来るまでは目の前のことをとにかく後悔しないように努力し続けること。研究者の道は狭き門ですが、チャンスが来た時に、準備ができていれば、必ず道は開けます。

フクロウの置物

マストアイテム

PCの横に置いてあるフクロウの置物。ここ数年は、実験よりもデスクワークの時間が格段に増えました。久慈の民芸品店で、ひとつめ自分で買ったのですが、研究費が途切れかけているときに、毎日のように撫でてはいると、見事！ 抜擢されました。私にとっては、お守りです。

No.11

色々な経験は必ず役に立ちます！

[2015.7]

いし
だ
より
こ
子

●秋田県農業試験場
企画經營室 主査



Researcher

プロフィール

筑波大学大学院修了→同年4月に秋田県農業試験場に就職。この時、機械関係の研究員として配属→2年後、土壤肥料関係の研究を始める→平成25年に秋田わか杉科学技術奨励賞を受賞→今年（平成27年度）から企画担当へ異動し研究のサポートをしています。現在、優しい夫と可愛い犬との3人暮らし。

■ 研究内容を教えてください

野菜に係わる土壤についての研究です。野菜を育てるには、養分となる肥料が必要ですが、肥料にもさまざまあります。その中で、有機物、特に、家畜ふんや植物資材を混せて発酵させた堆肥が、どれくらい栄養が含まれていて、その栄養は作物と土壤にどう影響して、野菜に吸収されなかつた栄養が地下へ流れた場合の環境負荷は？という内容です。

■ 進路を決定したきっかけや今の研究をしようと思ったきっかけがありましたら教えてください

もともと、化学や数学が苦手で、絵をかいたり、音楽が好きな文系の人間でした。化学の面白さに目覚めたのは、大学に入つてからです。それは、化学結合をしたもので、すべて作られているんだと気づいた瞬間でもあり、もっと勉強をしておけばよかつたと後悔した瞬間もありました。大学院生活では、就職活動を全くしていなかったのですが、同じ学会に入っていた知り合いの方から声をかけていただいたことから、試験を受け、現職場に就職することになりました。

■ 仕事を両立するために実践している事、心がけている事はありますか

仕事を以外の“楽しみ”をみつけることです。仕事を全く考えずに、家族と過ごす時間を作ります。“楽しみ”的に仕事もがんばろうと思えます。

■ 研究者を目指す女性大学院生・学部生の皆さんへメッセージを一言お願いします

もともと土壤を勉強したことはなく、農作物を相手にしたことはありませんでした。そのため、今まで知らない分野の中で、人脈もなく、ゼロというよりマイナスからのスタートでした。しかし、今まで学んだことがあるからこそ、違う面から物事を見ることができると思っています。知識を学び、吸収し、それを研究に応用・活用する能力を身に付けるということは、柔軟な思考力がある学生の時期こそ重要です。将来的には、一つのこと集中し成果をあげるということが研究者ではありますが、それには多角的に物事を見ることができてこそ研究につながるのではないかでしょうか。無駄になる経験は一つもありません。今時期に、ぜひ、様々な経験をし、色々な人のつながりを大切にしていただきたいと思います。



今は、研究をサポートする企画の仕事をしておりますので、フィールドワークはありませんが、以前であれば、真っ先に「日焼け止め」でした。今は、“楽しみ”的”の一つである、家族との旅行です。特に、海が好きで、青い海を見て潮風を浴びるとリフレッシュできます。

No.12 これが私の生きる道

[2015.9]



菅原香織

●秋田公立美術大学
美術学部 景観デザイン専攻 助教

プロフィール

多摩美術大学卒→照明計画の会社に就職→父親の秋田転勤をきっかけに秋田に転職→秋田市立美術工芸専門学校の講師として勤務→秋田公立美術工芸短期大学開学にともない助手として採用＆結婚→翌年長男出産・4ヶ月の育児休業後職場復帰→3年後長女出産・1年の育児休業後職場復帰→秋田公立美術大学開学にともない助教として勤務→翌年長男が県外の大学に進学したのを機に秋田県立大学大学院に社会人入学、現在は週に2日程大学院に通学中。

■ 研究内容を教えてください

様々な社会的課題を解決する「ユニバーサルデザイン」「インクルーシブデザイン」「コミュニティデザイン」といった新しいデザインの研究領域を設置する大学が増えていますが、これまでのデザイン教育では実現できなかつた人々の「思いや願いの実現」や「共有すること」の欲求に応え「人々の福祉に資する」という機能が「デザイン」に求められていると考えられます。そこで「公共デザイン」という研究領域を確立するため、国内外の公共の施設や空間デザインのプロセスの調査や実証研究から、公共デザインに携わる人材育成のためのカリキュラムについて研究しています。

■ 進路を決定したきっかけや今の研究をしようと思ったきっかけがありましたら教えてください

美大に進もうと思ったきっかけは、高校2年のときに女子大に通っていたいところから「文系の4年生を卒業しても女子の就職先はない」と言われたことです。当時は男女雇用機会均等法が出来る前でした。ならば手に職を付けるか専門職につながる大学が良いと思い、もともと工芸やデザインに興味があつたため、美大を受験し、多摩美術大学でインテリアデザインを学びました。今の研究をしようと思ったきっかけは、妊娠・出産・育児・介護の経験を通して一

歩外に出ると個人の力ではどうしようもない「社会的障壁」があることを知り、それらの課題をデザインによって解決できることが出来ないか?と思つたことです。

■ 仕事と生活を両立するために実践している事、心がけている事はありますか

バランスの良い食事と睡眠をとることを心がけています。また、ストレスをためないよう気分転換に趣味（筝）の時間を作つてリフレッシュしています。

■ 研究者を目指す女性大学院生・学部生の皆さんへメッセージを一言お願いします

研究者を目指すのに、女性だから出来ないということはありません。でも女性にしか出来ないこと（妊娠・出産・母乳）に挑戦するチャンスが訪れたときのために、心身ともに「健康」に気をつけて準備しておくことをお勧めします。



編集◆女性研究者支援コンソーシアムあきた
発行◆平成27年10月
女性研究者支援コンソーシアムあきた事務局
(秋田大学男女共同参画推進室 coloconi 内)
TEL:018-889-2260 FAX:018-889-3186
E-mail:sankaku2@jimu.akita-u.ac.jp